甘藷傳來

長崎には薩摩より傳へて、今は九州に流布す、但寒地には榮へがたし、唐人は酒にも造り、又水飛し粉を取て餅にしたるは、上品の物なり、

〔浪花の風〕薩摩芋は殊に多し、青みあるものと、赤みあるものとの二種にて、青みあるものは、俗に水芋と唱ふる種なり、水芋の方都て甘みは強し、

〔大和本草五菜蔬〕甘藷○中略　此種元祿ノ末、琉球ヨリ薩州ニ渡ル、煖土ニ宜シ、寒地ニ植レバ生ゼズ、番薯ノ如シ、經久味ヲトル事本草ニ云ガ如シ、

〔本朝世事談綺二生植〕甘藷

元祿の末、琉球より薩摩へわたる、煖土によろし、寒土に植れば生ず、本綱云、南方の海人多壽なるは、五穀を食せず、甘藷を食するゆゑなりとあり、此蔓を切植に、根生て活す、土人朝夕飯に充、あるひは蒸て干粉にして餻とす、民食を助け飢を救ふ、其利大なり、肥前薩摩に多植る、東武へ來るは頃年○享保なり、

〔塵塚談下〕薩摩芋の事、日本には寶永元申年より、琉球芋薩摩ゟ種來る、長崎にて專ら種たるよしなり、青木文藏名敦書、號崑陽當時百五十俵、青木岳太郎祖父か曾祖父なるべし、蕃藷考と云ふ書を著し、享保二十年乙卯二月十五日上書す、書中に薩摩よりも蕃藷種藏の法を上書せし事を載たり、最初唐土より琉球へ渡り來り、琉球より薩摩へ渡りて、三十四五年程に相成よしに見へたり、同年三月、文藏に植立候樣被仰付、小石川養生所内へ圃をこしらへ造り、元文元辰年御止になり、同二巳年三月三日、養生所勤役の者へ芋割賦し、芋畑引拂被仰付、其後諸國へ流布して人每に食し、朝夕の助となれり、寶曆年間に至りては、上總下總銚子岩槻伊豆大島其外諸所ゟ多く作りて江戸へ運送す、銚子を上とし、大島より出るを島芋といふて絶品なり、近歳に至り大なる國益といふべし、

〔成形圖說二十五穀〕唐芋（カライモ）是專俗の通稱なり○中略